

新選百物語卷五

○夢いそりくぬ塵塚の義士

良業の口み苦く令云耳に逢ふと古人の義士
なりや今いひて位列相傳村と云ふ小島に
在ると云ふ人あり皇親を傳て用ひれを病氣
採して賊をとりけ村に引退き子習業後と業
として世を背負く送れり生業業
也方下の志業やまひる地の村よりこれ
を傳へり多くありまをけさ何とぞして今
二間を建てるく日之を位列村中へ居る

即ち半を其れを其れして送けける村中も
本た徳の不自由に位居をうたつ市場もも
と求むれども相懸の地もまをりその比根を
補とて皆人忍れて位づれに五子をり
なりし九間四面の塵塚ありこれ其の本と云
症面筋といひやせに達てを後て画年あり
後暇とらとて甲斐あるまとい相後もい
に十系とて村年高その度小居合とて思
業一とてありのむるが帯此人といふか
門よりある人を塵塚の呪の用也といふ何ぞん

其母をむき一熟くりく申入返言みする
まづ一かの人居きまをこれその塵
塚の人乃修家とある事なれば此是是りて
大急そと居友ともく因をわす武家の一
面一狐屋舗の始終を倍れに武家の事と申
て思ひぬくぬは縁切は礼はくされり
数年の内地にて今修塚とありこれ
狐の住べきと一礼をのべのまれば村中そ
悦びて修塚とりて家造と申れまふ小ぬ
て本居の事なつりの祝儀を武家の歳迄の

新編百物語五

きげんの子をあー皆く言不ぬり多武家の
悦びのまれば狐の氣さへいんやのうらまの
あく生の言となとしておしを秋のまらんと
月にてまろくたまれば古きもの思
膏一獲そりまを痛みしを多のし
三更の鐘つびくわいそまらまんと小風
引立附具うちわき森々たる秋風まると
まづり侍ふあり一燈の消えんとて又あきら
ぬあそけにぬたる附路次下駄の音即ち
あゝぬれどと思つちらふてりくとまら

武左衛門の志すく若刀引せ息をつめよしの田舎
うひひーダ勢くありてうけ小橋狀九景で討
て武士く見ゆてけ身とこのムトとらひ修ち
ハ勢の勢とりんことじらとととなく考くら
武左衛門の生質剛勇不敵のまのされバ人少といで
返くらが刃もたかりを毎夜ありてこのいふ
五日つふハ武左衛門とて武のまありゆて
見とけんと言ふ用意一徳ととらふとこの
よく考らうと武左衛門考て何奴よ一徳と
はありかくれこれにの初と主人も多た我を欺

新編 武蔵野

うぶかえんとて牛ハと扇風と面そ列のこれ
を穿ちう屋一齋齋武左衛門のいこく此のま
まこのはなをあくつせよとた小井ゆてハ微塵も
ふさんと刀共ふつめゆたれハ齋齋の侍
よをうらうけぬ考をま一全く狐とあふあ
らば物考ハ坂崎島とてよく列の浪人との
新居里村めくらとせ一十年とあたまきり
別上の空あり因縁ありてかふらつてき面をれ父
みの妻をうらまきり別ハ猿路みせとせしむら
然るに千師を承て一移ぬぬとて人信

若人の初孫を万葉に奪つておれはす
く貪りかりけり我父を隠して旅人の身
の困窮へ致して難儀する一と折小おいて
羊積まともつけやせしにすれまを
て後くハ九条よりそと合力を
奪つておれはす少小す令伝

形もあはれつハ御
定言ハ其他の必後

其初りのおれはす一をとり方くと旅と
て少合を今後列と逃さる高人の身と
しすともめし御おれはす五年の間おれは
まよけまや六のちおれはすのふしを
いのちたよおれはすともめしおれはす
つておれはすかともめしおれはす
頭よのちかともめしおれはす我父後
人にならまて去まをれおれはす
狐を捕と名をうりて塵塚とまら
後念や人もおれはすと思ふおれはす

Q



とて修不極りあふと極に我親のむいーと育病
の浮木と得てうかぶと一丸集いた今 医者
名を録居くあつとえて若谷村小居位より何
とそ彼をいぬふの事まを妄紙をとつてその人
とつくと思ふを忽ち霧霧の洞て然けは武
左衛門の候とまがー亡者のいんやせりより若谷村
を尋ねたる江列の春の医者よりとて板村移居
と書て書あるはねに入初せり不尋子外亡者
れ若一詞のあく錢のむくついでとせぬ
まををいへて之候と勤七が靈魂へ首と供へて

新羅百か語五

存とす一その後首と土中に埋も極れ武士と
まて勤七へ約とた久を丸をを討ハ靈魂の
をたす妄紙を裁とるをと我よりこの業と
とととを仇とす一とく思へハ浄佛のまを
菩提をすむるそと始終のまをとく一を
書るをりとも其母一子と封ト入塵たのふと
おれ一々其初末候とてとを

○井筒ふより一二人見ゆ

世不不家とすまはる一と人としてふ妙とす
身をあれを有りのまの磁石の鉄を吸脱病

の塵をとり煙の火れやをらにうけるをどんて付
て教へるや付と不意なる身針さうんつ傳
屍といふ病あり俗れを氣方とて一人けやまの
さうまの志をいかに血脈をさして病死し
家門を断絶する身眼をさして医書も病
根とさゆいふ論し方訓もあましくあはれ古
今け病の全愈するもとて牛と中とをもち
んどう病をりし今いむし阿波の國佐吉町とて
やふま加治や傳業とてふその家の人回寄して
たを嫡子階生業生災丁寧いして家業うと

井さうてさるれを一門いふあむに迎色の人く
子にさるるふも傳業を見やるといふ人の人あは
あふ附傳業来二三日病氣とてさく勢くといひの
丹入言いきして合おもとて候さるし四五日過
て何ともさるん丹小指て死なむい妻子兄弟をけ
とさる具於寺へ葬りて五十日を過れんとて
幼女の女子のままに男侍をとりて男相續
しけりて実老後の矢のどく傳業が一周忌と有
傳をまねと佛坐をす張るかきとて弟いさ
にその夜伊倉まき井小指たつたその言ふ家内

此の如き引あぢられを病まるとして外科より
移して若生をせ二十日となりて本腰にて常死
こゝに家業も決りあまると二十日を過ぐるがやう
くと短く六六板の返つる病の若生よりその人
と業を引ひ十日となりて色を過けるやう終りに井小
臨死しそれにあまるとあうくと送葬して其のち一門
を傷めり其内徳の信令ありやまると云業の
まのなれり色どりの義理もせ海り断れどく死
しや少やとて多くと愈後をれとも信令も
なくを少とて多くとを家業を引とほら

たがひなく不安なれ程とも死後の愈後の益
のまをくと三男の業も家督とらを汲男信令の
一門忌も吊ひて十日となりて色を過ぐると思ひ
て色を夜半の死の多くと回とく井小臨死の多
れ考ども起念を救ひあぢて業を用ひの道とれ
若生をれり何とせん富令の死のやうに入
る業のせんとせり子の一門家内入のく
寝との書してやうすとすのひ二十日も過り
しる自然と心氣みちのまは一門中信令うて
つるふ事おて井小臨死するといひ

君移れく九音の井よりきまは紐くうた
に井で井小隔りて死まふとい思ひをう
朱るれとも作らるるす熟睡のまうた
夢さく起よくといふのあり寝耳小入く
みうとあぢをえれとも人もさく夢
え井の方み多し以に其夢さく
れを死する見とも井中より
とあげてま移くといく
井小く善悪をいふ人
ふかしく愛れ心入る
後

後 善悪をいふ人
死てまなまはあはるや
とまらぬと引く四五ヶ月を
久地ありして大工町と
家内と移り世前のあり
ハマとくを病ふして日
怪ありきまをいふ子孫
狐たぬきのふあり其ゆえ
是人のあつてま

○鬼み移るく五人の悪者

喰うて樂しきまんじ饅頭の柄みくらつ布初しく
くふ道よりして惣の仲間みお舎一ヶ若く
くれよ一俵にそまの不思議にさつとて
四五人あのみり耕起して手柄をへれた酒
ふまなく大ふ碎ちて煮のうた世とたの目
一ヶ其後十日も造つは控ぬらまを鑽と
たげこが回地の敵ささしけすを火あしり
お一ちり見とひらくとちうけが今日も又
ぶくよりうきあうけん狐今般の虎をくら一
さんふのちりゆく控ぬら吃とて福徳の

新撰百物語

めがきぬくの母さう輝返りのつて
いさうけとんと攪うら振ておのれが狐を
さるさうとこしんとぬらまを飲と煮
あふいのり遠回をあつて逃さんとひのさ
あふ花まられとあふあふちかたてうそのなん
あく道つら虎うちせせ狐もほられて
えのれ控ぬら虎よりあふやれくひう古
狐せとぬ寄をせせ一ヶまんまをたきせ
うりさうが喰きてあつしんと道を
まうへに彼惣都仲間とすいふはうの今川の

そつとにほふと小徳り神方と求めて吸おろし
らるるまを酒と碎りしり其村の庄友あり
今年五六枚といふ事さうり之をといひて
子の色おまにもた一人の世にありしと天命
のくれさうして七日ますや病瘵と運老とを
はくし糸を用ひさぬくと若生られと後不
きのムツ堂とらむるしりしりいぬれぬ款のかけこ
はをさうりなれぬと斯て色々のべさすなれ
を野邊に送り香花と供へおとらしたけをさる
折あり張りのまを二三人たり三若孫の

一若孫百物語

ゆけに持ゆりか返りし西窓
おき若孫の本けす神河原の七五を搦回れ
次五人の若孫物少て居るをを食しりせん
さかたんませと云ふ事さうりはつりし
いせつらうて自墓みりしりしれん
いさくはくし病も足保はすうと
いさくはくし病も足保はすうと
裏口少て病も足保はすうと
あやけり少て病も足保はすうと
いさくはくし病も足保はすうと